

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

玄洋社怪人伝

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

玄洋社怪人伝

頭山満とその一派

著者

頭山 満
的野半介
杉山茂丸
内田良平
夢野久作

書肆心水

本書について

本書は、玄洋社を代表する頭山満とその一派の行動、人となりを伝える文章を集めたものです。杉山茂丸はある時期から玄洋社を離れて杉山個人として行動しましたが、杉山の葬儀が玄洋社葬としておこなわれたことからも分るように、終生頭山満との強い関係において活動しました。内田良平もある時期から黒龍会の主催者としての活動を主とするようになりましたが、内田の活動もまた常に玄洋社の頭山満と強く結びついたものでした。本書ではこの二人も広義の玄洋社に属するものと考えて、「玄洋社怪人伝」の書名にて全体をくくりました。

なお、本書に収めた文章のうち、頭山満本人の談話、杉山茂丸本人の著作の抄録、内田良平の部の二篇は、二〇〇八年に書肆心水より刊行した『アジア主義者たちの声（上）』にも収めたものです。（同書収録内容のうち大養穀の部を除いた本文のほとんどが本書にも収録されています。）同書はしばらく前から品切ですので、同書ご入手ご希望の方は本書をその代わりにお求めいただければ幸いです。既に『アジア主義者たちの声（上）』をお読みの方は、本書の収録内容をよくご確認いただいてからお求めになられますようお願い致します。

二〇一三年九月　書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

玄洋社怪人伝

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

頭山満の部

頭山 滿 …… 夢野久作 著
頭山満談話選 …… 頭山 滿談

明治十年戦争の翌年、板垣退助との交渉 32
金玉均のこと 32

大隈重信要撃の爆弾を大井憲太郎に乞う
来島事件で取り調べ 37
辛亥革命に際しての渡支 37

日華同盟条約 40
日本の世界に対する大使命 43

大きなボイラー、頭山満

来島恒喜の部

『来島恒喜』抄

的野半介 監修

53

杉山茂丸 講談

47

頭山 满談 28 13

大隈案に対する反対運動と恒喜の出京 53
恒喜の決心と爆弾準備の運動 61
霞関の一撃 68
爆弾と同志の引致 77
弾爆の反響 80
恒喜の葬儀及び墳墓 86

性 格

89

恒喜の葬儀及び墳墓

77

恒喜の葬儀及び墳墓

86

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

国士の典型 92

杉山茂丸の部

天下の鬼才、杉山茂丸

『百魔』抄

頭山 満談
杉山茂丸 著

同郷の偉人頭山満氏との初対面

平岡浩太郎氏と初対面の悲喜劇

103 99

大隈外相爆弾事件の嫌疑で

107

『俗戦国策』抄

東亜の大経綸と大官の密議

112

杉山茂丸 著

一億三千万ドル借款事件

121

決死の苦諫、伊藤公に自決を迫る

139

『其日庵叢書』抄

人生と迷信

112

杉山茂丸 著

迷信と幸福

157

父杉山茂丸を語る

161 157

杉山茂丸 著

杉山茂丸

父杉山茂丸を語る

夢野久作著
夢野久作著

179 163

杉山茂丸 著

157

内田良平

内田良平 著

夢野久作著
夢野久作著

199

内田良平の部

日韓合併思い出話

内田良平 講談

夢野久作 著

97

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

はしがき／閔妃一族の専横／東学党の乱起ころる／我々浪人の奮起／警戒網を突破して／武器弾薬の掠奪／いよいよ行動開始／可哀相な鮮人／東学党員と語る／他愛もない党員／伊藤公に隨い渡鮮／統監府に居候堂／韓国政府の氣流／李容九の要件／宋秉畯無事釈放／藤公、合併に同意／ハルピンの兎変／吾々同志の信念／計画極秘に進む／杉山覚書の内容／秘密厳守の苦心／寺内伯の朝鮮入り／日韓合併の口火／日韓合併の調印／大陸進出の礎石／善政は施されたか／融和の実を挙げよ／根源深し藩閥政治／裸虫の集まり素浪人／日韓合併の真精神／李容九との問答／即ち大アジア精神／日韓一家の結合／判りましたの一語

『硬石五拾年譜』抄

朝鮮の東学党と天佑俠

233

シベリア渡航と露兵との相撲

248

ウラジオストックの道場設立と支那人との試合

251

シベリア横断旅行

252

露都滯在と帰国

265

内田良平著

233

奈良原至の部

奈良原到

夢野久作著

275

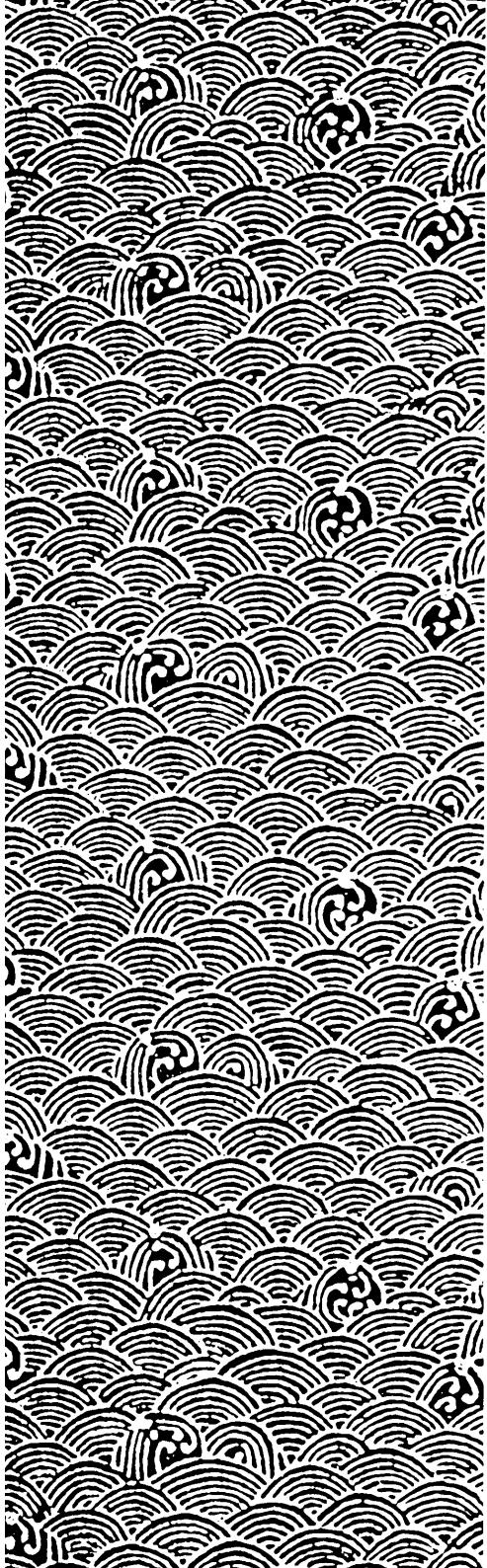
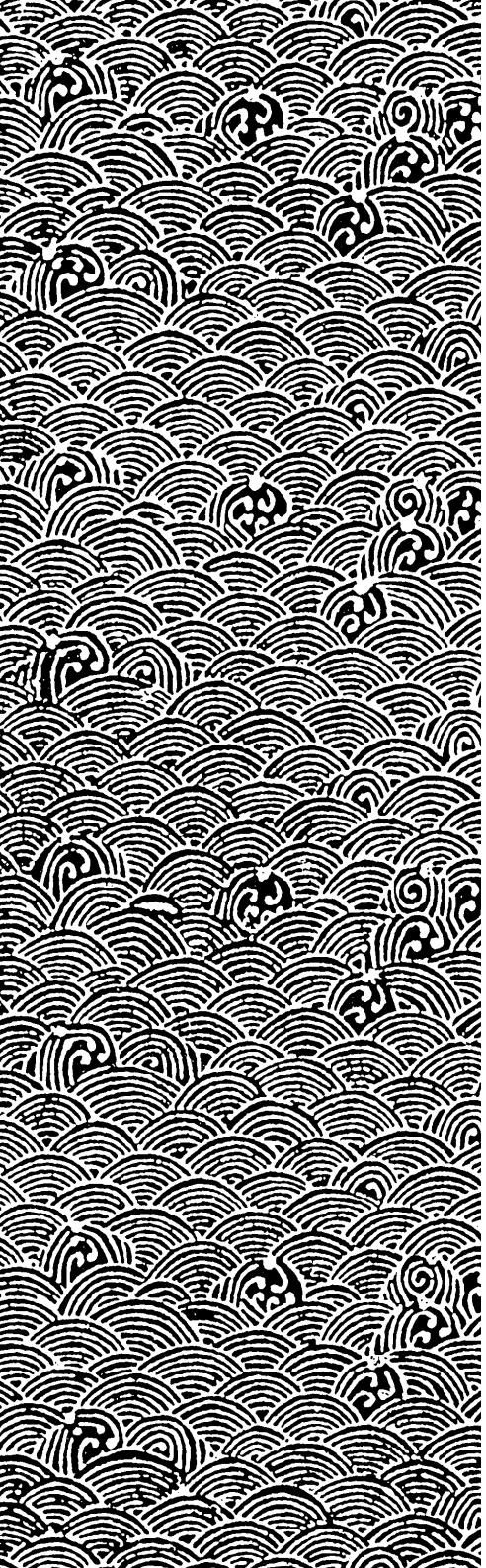
進藤喜平太の部

玄洋社長進藤喜平太翁

夢野久作著

307

SAMPLE
Shoshi-Shinsen.com



支洋社怪人伝

本書の表記について

- 本書収録の各篇原典はいずれも旧漢字・旧仮名遣いのものであるが、本書では読み物としての親しみやすさをむねとして、全体的に次のような方針で表記した。
- 一、新漢字の標準字体、新仮名遣いでの表記を原則とした。「武」「拾」「廿」は旧漢字ではないがそれぞれ「二」「十」「二十」に置き換えて表記した（固有名詞中ではそのまま）。
 - 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」以外不使用とした（二の字点は「々」に置き換えた）。
 - 一、現今一般に漢字表記することが稀になり、読みにくく感じられるものを平仮名表記に置き換えた（名詞は除く）。
 - 一、「兎に角」などの当て字も平仮名表記に置き換えた。
 - 一、平仮名表記に置き換えなかつた難読漢字には便宜的に読み仮名ルビを施した。原典にあるルビと本書発行所が補つたルビが区別できるようにはなつていない。原典にある読み仮名ルビのうち、なくともよいと考えたものは削除した。
 - 一、読み仮名ルビを補わなくとも送り仮名を加減すれば読みやすくなる場合はそのようにした。それ以外にも送り仮名を加減したところがある。
 - 一、句読点を現代風に加減し、中黒点を適宜補つた。濁点も適宜補つた。傍点の形状は統一して表記した。
 - 一、旧漢字ではないが、聯→連（連合）、劃→画（画期）、轉→集（編集）、瓦→亘（亘る）、のように、現今後者の用字が大勢であるものは後者で表記した。
 - 一、外国地名などの漢字当て字は、現今最も標準的と考えられる片仮名表記に置き換えた（原典で片仮名表記されているものを現今最も標準的と考えられる片仮名表記にすることはしていない）。
 - 一、鉤括弧の用法は現代の慣例に即して表記した。
 - 一、「ママ」のルビは原文のままの意味で、正誤を判断しかねる場合、誤りを正しかねる場合、あえて直すまでもなからう場合に使用した。
 - 一、（）で括った行内の二行割注は本書刊行所が便宜的に補つた注釈である。
 - 一、原典における闇字（二字空け、平出（文中の改行）の敬礼書式はこれを省いた。
 - 一、右記の表記現代化処理は引用部分においてもおこなつたが、詩歌については元のままに表記した。
 - 一、各篇の冒頭にある＊印付きの注釈において原典の書誌などを記載した。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPL
Shoshi ui.com



頭山満（とうやま・みつる）1855年生、1944年歿

頭山 满

夢野久作著

*夢野久作著『近世快人伝』（一九三五年、黑白書房刊）の巻頭章。『近世快人伝』は、『新青年』での連載をまとめたもの。

ナーナー。奇人快人と云うから、どんな珍物が出て来るかと思つたら頭山先生が出て來た。第一あんまり有名過ぎるじや無いか。あんなのを奇人快人の店に並べる手はない。明治史の裡面に蟠踞する浪人界の巨頭じやないか。維新後の政界の力石じやないか。歴代内閣の總理大臣で、この先生にジロリと睨まれて縮み上らなかつた者は一人も居ない偉人じや無いか……とか何とか文句を云う者が大多数であろう。

……怪しからん。頭山先生を雑誌の晒し物にするとは不埒な奴じや。頭山先生は現代の聖人、昭和維新の原動力だ。そんな無礼な奴は綾め上げるがヨカ……とか何とか腕まくりをして来る黒切符組も無いとは限らないが、まあまあ待つたり。話せばわかる。

筆者のお眼にかかつた頭山先生は、御自身で、御自身を現代の聖人とも、昭和維新の原動力とも、何とも思つて御座らぬ。「俺は若い時分にチットばかり、漢学を習うたダケで、世間の奴のように、骨を折つて修養なぞした事は無い。一向ツマラヌ芸無し猿じや」と自分でも云うて御座る。それでいて西郷隆盛のいわゆる、生命も要らず、名も要らず、金も官位も要らぬ九州浪人や、好漢安永氏のいわゆる「頭山先生の命令とあれば火の柱にでも登る」というニトロ・グリセリン性の青年連に尻を押されて、新興日本の尻を押し通して御座つた……しかも一寸一刻も、寝ても醒めても押し外した事は無かつた。日本民族をして日清、日露の国難を押し通させて、今は

又、昭和維新の熱病にかかりかけている日本を、そのまんま、一九三五年の非常時の火の雨の中に押し出そうとして御座る。……よう見えるが、その実、御自身ではどう思つて御座るかわからない。ただ相も変わぬ芸無し猿、天才的な平凡児として持つて生まれた天性を、あたり憚らず發揮しつくしながら悠々たる好々爺として、今日まで生き残つて御座る。老幼賢愚の隔意なく胸襟を開いて平々凡々に茶を啜り^{すす}、談笑して御座る。そこが筆者の眼に古今無双の奇人兼快人と見えたのだから仕方が無い。世間のいわゆる快人傑士が、その足下にも寄り付けない奇行快動ぶりに、測り知られぬ平々凡々な先生の、人間性の偉大さを感じて、この八十幾歳の好々爺が心から好きになつてしまつたのだから致し方が無い。そうして是非とも現代のハイカラ諸君に、このお爺さんを紹介して、諸君の神經衰弱を一挙に吹き飛ばしてみたくなつたのだから止むを得ない。

元来、頭山先生が、この新青年に、きょうが日まで顔を出さないのが間違っている。それも頭山先生が時代遅れのせいでは無い。却つて新青年誌の方が頭山老人の思想よりも立ち遅れている事を筆者は確信しているのだから是非も無い。ここに先生の許しを得て、逸話を御披露する。

頭山満翁の逸話と云つたら恐らく、浜の真砂の数限りもあるまい。頭山満翁はさながらに逸話を作りに生まれたようなもので、その奇行快動ぶりと云つたら天下周知の事実と云つても憚らない位である。

しかし仔細に点検して來ると、その鬼神も端倪すべからざる痛快的逸話の中にも牢乎^{らうこ}として動かすべからざる翁一流の信念、天性の一貫して居るところを明白に認める事が出来る。

すなわち翁の行動には智力を用いた形跡が無い。何でも行きなりバッタリの無造作、無鉄砲を以て押し通していく処に、翁の真面目が溢るるばかりに流露している。そうしてその真面目が、日常茶飯事に対しては意表に出づる逸話となり、国事に触れては鉄壁を碎く狂瀾怒濤となつて行くもののようにある。

蛇は寸にして蛇を呑む。翁が十歳ばかりの年の冬に家人から十錢玉を一個握らせられて、蒟蒻^{こんじやく}買いに遣られた。その頃の蒟蒻は一個二厘、三厘の時代であつたから、定めし十個か二十個買つて來いと云う家人の註文で

あつたろう。

ところが十幾歳の頭山満は菊蕪屋の店先に立つと黙つと黙つて十銭玉を一個投げ出したので、店の主人は驚いた。

「これだけミンナ菊蕪をば買ひなさるとな」

翁は簡単にうなずいた。

菊蕪屋の主人は菊蕪を山の様に数えて、翁の前に持つて來た。

「容れ物をば出しなさい」

翁はやはりだまつて襟元を寬げた。^{くつわ}ここへ入れよと云う風に、うつむいて見せた。そうして主人が驚いて見ているうちに、氷よりも冷たい菊蕪の山を懷中に攢み込んで、悠々と家へ帰つた。

頭山翁は終生をこの無造作と放胆振りでもつて押し通している。

「俺は無器用な奴じやがのう。しかし、その無器用な御蔭で、天下の形勢の岡星だけは見外さぬ様になつとる」
云々。

「しかしこの頃俺に書画、骨董や、刀剣の鑑定を持ち込んで来るには閉口しとる。一番わからん奴の処へ見せに来る訳じやからぬ。ハハハハ」

グロの方ではコンナ傑作がある。

大阪に菊地なにがしという市長が居たことがある。中々の遣り手でシッカリ者と云う評判であつたが、これに頭山先生が、何かの用を頼むべく会いに行つた事がある。同伴者は先生の親友で、後の玄洋社長の進藤喜平太氏であつたと云うが、市長官舎の応接室に通されて待てども待てども菊地市長が現われて来ない。天下の豪傑、頭山満が来たと云うので、才物の菊地市長尊大^やぶつて、羽根づくろいをするために待たせたものらしいと云う後人の下馬評である。

ちょうどその時に頭山先生は、腹の中でサナダ虫を湧かして、下剤を飲んで居たので、そいつが利いたと見え待つてゐるうちに尻の穴がムズムズして來た。そこで頭山先生懐中から股倉へ手を突込んで探つてみると、何かしら柔らかいものがブラリと下つてゐる。抓んで引っぱると、すぐにツツリと切れてしまつた。股倉から手を出してみるといかにも名前の通りに白い、平べつた、サナダ紐みたいなものが一寸ばかりブラブラしている。

見ると目の前に、見事な金蒔絵をした桐の丸胴の火鉢があつたので、頭山先生その丸胴の縁に件のサナダ虫を横たえた。進藤喜平太氏も不審に思つて覗いてみたが、何やらわからないので知らん顔をしていたと云う。

そのうちに又、頭山先生のお尻の穴がムズムズして來たので、又手を突込んで引っぱると、今度は二寸ばかりの奴が切れ離れて來たヤツを、やはり眼の前の火鉢の縁へ前の一 片と並べて置いた。察するに頭山先生いは退屈凌ぎを見付けた積りであつたろう。悠々と股倉へ手を突込んで一寸、又二寸とサナダ虫の断片を取り出して、火鉢の縁へ並べ初めた。

誰でも知つてゐる通りサナダ虫は一丈も二丈もある上に、短かい節々のつながりが非常に切れ易いので、全部を引き出し終るにはナカナカ時間がかかる。とうとう火鉢の周囲へ二まわり半ほど並べた処へ、やつとの事、御大将の菊地市長が出て來た。黒羽二重五つ紋に仙台平か何かの風采堂々と、二人を眼下に見下して、

「ヤア。お待たせしました」

と云いながら真正面の座布団に坐り込んだが、火鉢の縁へ手を載せたトタンにヒイヤリとしたので、ちょっと驚いたらしく掌を見ると、白い柔らかい、平べつたい、豆腐の破片みたようなものが手の平へ二、三枚へパリ付いてゐる。嗅いでみると異様なたまらない臭いがする。菊地市長いよいよ驚いたらしく背後をかえりみて女中を呼んだ。

「オイオイ。この火鉢の縁の……コ……コレは何だ」

女中が真青に面喰らつた。ちょっと見た処、正体がわからないし、自分が並べたおぼえが無いので、返事に窮していると頭山先生が静かに口を開いた。

「それは僕の尻から出たサナダ虫をば並べたとたい」

菊地市長は「ウワアッ」と叫んで襖の蔭に転がり込んで行つたが、それつ切り出て来なかつた。

二人は仕方なしに市長官舎を辞したが、門を出ると間もなく正直者の進藤喜平太氏が、

「折角会えたのに惜しい事をした」

とつぶやいた。頭山先生は又も股倉へ手を突込みながら「フフン。あいつは詰らん奴じや」

まだある。

これは少々グロを通り越しているが、頭山翁の真面目を百パーセントに發揮している話だから紹介する。頭山翁が玄洋社を提げて、筑豊の炭田の争奪戦をやらせている頃、福岡随一の大料理屋常盤館で、偶然にも玄洋社壮士連の大宴会と、反対派の壮士連の大宴会が、大広間の襖一枚を隔ててぶつかり合つた。

何がさて明治もまだ中途半端頃の血腥い時代の事とて、何か一と騒動初まらねばよいがと、仲居、芸妓連中が心も空にサービスをやつているうちに果せる哉始まった。

合の隔ての襖が一斉に、どちらからともなく蹴開かれて、敷居越しに白刃が入り乱れ、遂には二つの大広間にブツ通した大殺陣が展開されて行つた。

大広間に置き並べられた百匁蠟燭の燭台が、次から次にブツ倒れて行つた。

そうして最後に、床の間の正面に端座している頭山満の左右に並んだ二つの燭台だけが消え残つていた。これは広間一面に血の雨を降らせ合っている殺陣連中が、敵も味方も目が眩んでいながらに、そうした頭山満の端然

たる威風に近づくとハッと気が付いて遠ざかつたからであった。

その頭山満の左右と背後の安全地帯に逃げ損ねた芸者仲居が、小さくなつて固まり合つて、生きた空も無くなつていた。しかし頭山翁は格別變った氣色もなく、活動のスクリーンでも見てるような態度で、眼前の殺陣を眺めまわしていたが、そのうちにフト自分の傍に一人の舞妓がヒレ伏しているのに気が付くと、片手でその背中を撫でながら耳に口を寄せた。

「オイ。今夜俺と一緒に寝るか」

これは頭山翁お気に入りの仲居、筑紫お常婆さん（つね）の実話である。この婆さんもまた、一通りならぬ変り物で、ミシンも作り飾りの無い性格であつたから、機会があつたら別に紹介したいと思う。

この婆さんが黙つて死んだのでホッと安心して御座る北九州の名士諸君が多い事と思うが、しかしまだ御安心が出来ませぬぞ。この婆さんから筆者がドンナ話を聞いているか知れたものでは無いのだから……。

頭山翁のノンセンス振りと来たら又一段と非凡離れがしている。つまる処は聖人以外の誰にでも出来る平々凡々振りであるが、その平々凡々振りが又なかなか容易に真似られないのだから不思議である。頭山翁の恐ろしさと偉大さは、その平々凡々なノンセンス振りの中に在ると云つてもいい位である。

かつて頭山翁が持っていた、北海道の某炭坑が七十五万円で売れた事がある。

これを聞いた全日本の頭山翁の崇拜者連中、喜ぶまいことか、吾も吾もと押し寄せて、當時靈南坂にあつたかの頭山邸は夜も昼も押すな押すな満員状態を呈した。下では幾流れとなく板を並べた上に食器を並べて、避難民式に雲集した書生や壮士が入り代り立ち代り飯を喰うので毎日毎日戦争のような騒動である。また階上の翁の部屋では天下のインチキ名士連が翁を取り巻いて借錢の後始末、寄附、運動費、記念碑建立、社会事業、満蒙問題など、あらゆる鹿爪らしい問題を提げて、厚顔無恥に翁へ持ちかける。

SAMPLE Shinsui.com

翁はそんな連中に対して面会謝絶をしないのみか、どんな事を頼まれても否とは云わない。黙々として話を聞き終ると金ならば金、印形なら印形を捺して遺つてミジンも躊躇しない。市役所へハキダメの物でも渡すよう瞬く間に七十五万円を費消してしまった。残るものは借金取りの催促と、雲集した書生壯士ばかりになつてしまつた。

それでも、まだ印形や金を借りに来るものがある。しかも以前に、二度と来られない様なインチキで翁を引つかけて行つた人間が、シャアシャアと又遣つて来るのである。それでも翁は何も云わずに無理算段をした金を遣り、印形を貸す。翁の一家は、そのために、七十五万円の富豪から一躍、明日の米も無い窮迫に陥つてしまつたが、それでも避難民張りの米喰い虫は雲集するばかり……。

或る人が見兼ねて、

「これはイカン。何とかしてコソナ恥知らずの連中を逐い出さねば、先生の御一家は野タレ死にをしますぞ」と忠告した。翁はニコニコと笑つて疎鬚を撫でた。

「まあ左様急いで逐い出さんでもええ。喰う物が無くなつたら何処かへ行くじやろ」

今一つノンセンス。翁と同郷の福岡に的野半助と云う愉快な代議士君が居た（別人とも聞いているが）。この代議士君……頭山先生は人物が出来とるから禅学を遣つたらキット成功する……と云うので翁を搦まえ、禅学を説き立てた。翁は黙つてウンウンとうなずきながら聞いていたが、とうとうこの愉快な代議士君に引っぱり出されて鎌倉の円覚寺に釈宗演和尚を訪う事になつた。

釈宗演和尚は人も知る禪風練達の英僧、且つ雄弁家での野代議士の崇拜の的であつた。さるほどに宗演老師は天下の豪傑頭山翁の来訪を喜んで、禅学に就いて弁ずる事良久。おもむろに翁に問うて曰く、「あんたは前にも禅学を志された事がありますかな」

翁曰く、

「ウム。在る。しかし素人じや」

「ハハア。誰に就いて御修業なされましたかな」

翁、傍に小さくなっている背広服の的野代議士をかえりみて、

「ナニ。ユイツに習うただけじや」

釈宗演和尚啞然。

ツイこの間新聞を賑わした法政大学の騒動の時、教授の一人である山崎楽堂氏が喜多文子五段の紹介か何かで単身、頭山翁を渋谷の自宅に訪問した。山崎楽堂氏は現代能評界に於ける一方の大御所で、単純率直、達弁の士である。

湯から上って来た頭山翁は、翁の居間にチョコンと坐っている楽堂君を見ると突立つたまま云つた。

「君一人か」

「ハイ」

と答へつつ楽堂君は簡単に一礼した。翁はこの時既に法政騒動の成行きと、楽堂氏の性格に関する概念を擰んでいたらしい事を、この簡単な問答の中から推測し得べき理由がある。

それから楽堂君が持つて生まれた快弁熟語を以て滔々と法政騒動の真相を披瀝すると、黙々として聞いていた

翁は、やがて膝の前に拡げられた法政騒動渦中の諸教授の連名に眼を落した。

「ウーム。あんまり複雑で、ワシにはよくわからんがのう。この教授の中で正しい事を主張しよる奴の頭の上に丸を附けて呉れんか」

楽堂君ちょっと呆れたが、命令通りに自分の味方の諸教授連の頭の上に丸を附けて見せると、翁はニコニコと

SAMPLE ShōnenShinsui.com

笑顔を見せた。

「フーム。正しい奴の方が、不正な奴よりもズット多いじゃ無いか」
「ハイ」

翁はマジマジと楽堂君の顔を見た。

「フフ。意氣地が無いのう。人数の多い方が負けよるのか」

樂堂君は返事に窮した。こう端的に子供アシライにされようとは思わなかつたので、眼をパチパチさせて居ると翁は一層ニコニコし出した。

「ウムウム。まあええから、そげな騒動しよる連中を皆一緒にここへ連れて来なさい。わしが聞き役になつて遣るけに、両方で議論してみなさい。わしが正しい方に加勢して遣る」

山崎樂堂氏は大喜びで帰つてこの旨を全教授に通告した。しかし折角の翁の心入れも、樂堂氏と反対側の諸教授の不出席によつてオジャンとなつたと云う。法政騒動裏面史の一席。

どうしてコンナ巨大な平凡児が日本に出現したかといふ……つまり頭山満の立志伝を書けと云われると筆者も少々困る。頭山満翁には元来立志伝なるものが無い。古往今來、あらゆる英雄豪傑は皆、豪い者になろうと、志を立ててから、その志に向つて勇往邁進したに相違ない。つまるところ志を立てなければ豪い者になれない訳であるが、頭山翁の生涯を見ると、その志なるものを立てた形跡が無い。従つてその立志伝なるものの書きようがないから困るのでだ。

勿論、頭山翁は若い時代に、維新後の日本が、西洋文化に心酔した結果、日に月に唯物的に腐敗堕落して行く状況を見て、これではいけないぐらいの事は考えたかも知れないが、それを救うためには自分が先ず大人物にならなければとか、実社会に有力な人物にならなければとか、又は大衆の人気を集めなければとか、人格者として尊敬されなければ……とか云つたようなセセユマしい志を立てた形跡はミジンも無い。持つて生れた平々凡々式

で、万事ありのままの手搁みで片付けて来ている。そこが頭山翁の古来ありふれた人傑と違つてゐる点で、その平々凡々式の行き方が又、筆者をして頭山翁を好きにならしめた第一の条件になつてゐるらしいのだ。

事実、頭山翁を平凡人なりと断定されて腹を立てる取巻きの非凡人諸君の中には、頭山翁が超特級の非凡人でなければ差し支える連中が多いようである。頭山翁の爪の垢を煎じて第一に服ませて遣りたい人間は、頭山翁を取巻くそんな非凡人諸君に外ならないのだ。

維新後、天下の大勢を牛耳つて、新政府の政治と、新興日本の利権とを併せて壇断しようと試みた者は、いわゆる、薩長土肥の藩閥諸公であった。その藩閥政治の弊害を打ち破るべく今の議会政治が提唱され始めたものであるが、そもそもその薩長土肥の諸藩士が、王政維新、倒幕の時運に参画し、天下の形勢を定めた中に、九州の大藩筑前の黒田藩ばかりが何故に除外されて來たのか。筑前藩には人物が居なかつたのか。もしくは居るとしても、天下を憂い、国を想う志士の氣骨が筑前人には欠けて居たのかと云うと、ナカナカ左様でない。事実はその正反対で、恐らく日本広しといえども北九州の青年ほど天性、国家社会を思う氣風を持つつてゐる者はあるまいと思われる。そうした事実は、明治、大正、昭和の歴史に出て來る暗殺犯人が大抵、福岡県人である実例を見ても容易に首肯出来るであろう。

維新前の黒田藩には、西郷南洲、高杉晋作に比肩すべき大人物がジャンジャン居た。流石の薩州も一時は筑前藩の鼻息ばかりを窺つていた位である。有名な野村望東尼を仲介として西郷、高杉の諸豪は勿論、その他の各藩の英傑が盛んに筑前藩と交渉した形勢は、筆者の幼少の時にしばしば、祖父母から語つて聞かされた事である。但しそれ等筑前藩の諸英傑が、何故に維新以後、音も香もなくこの地上から消え失せてしまつたかという、その根元の理由に考え及ぶと、筆者も筆を投して暗然たらざるを得ないものがある。

筆者の祖先は代々黒田藩の禄を喰んでいた者だから黒田様の事はあまり云いたくない。しかし何故に維新後に筑前藩が出来なかつたか……という真相を明らかにするためには、どうしても左の二つの事実を挙げなければな

らぬ事を遺憾とする。

一、当時の藩公が優柔不斷であった事。

二、黒田藩士が上下を問わず人情に篤く、従つて藩公に対する忠志が、他藩の藩士以上に潔白であった事。

ところでここで今一つ、了解して置いて貰わねばならぬ事は、昔の各藩の藩士が日本の国体を知らなかつた……換言すれば昔の武士というものは、自分の藩主以外に主君というものは認識して居なかつた事である。これは誠に怪しからぬ事で、今の人には到底考えられない。同時にあまり知られていない大きな事実で同時に、時節柄、御同様まことに不愉快な史実でもあり得るのであるが、しかしこの史実を認識しないで明治維新の歴史を読んでいると飛んでも無い錯覚に陥る事がある。すくなくとも王政維新なる標語を各藩に徹底させるのが、どうして、あんなに骨が折れたのかと不思議の感に打たれるので、黒田藩では特にこうした傾向が甚しかつた事が窺われるようである。

そこへ藩公が優柔不斷と來ているからたまらない。佐幕派が盛んになると勤王派の全部に腹を切らせる。そのうちに勤王派が盛り返すと今度は佐幕派の全部を誅戮する。そうすると藩士が又、揃いも揃つた正直者ばかりで、逃げも隠れもせずにハイハイと腹を切る……と云つた調子で、最初から一方にきめて置けば、どちらかの人物の半分だけは救われたろうに、藩論が変ることに行き戻りに引っかかつてパタパタと死んで行つたのだからたまらない。とうとう黒田藩の眼星しい人物は、殆んど一人も居なくなつてしまつた。たまたま脱藩して生野の銀山で旗を挙げた平野次郎ぐらいが目つけもの……という情ない状態に陥つた。

しかし世の中は何が仕合わせになるか、わからない。こうした事情で明治政府から筑前閥がノックアウトされたという事が、その後に於ける頭山満、平岡浩太郎、杉山茂丸、内田良平等々のいわゆる、福岡浪人の闊歩の原因となり、歴代内閣の脅威となつて新興日本の氣勢を、背後から鞭撻しあげた。……何も、それが日本のため

に仕合せであつたに相違無いと断定する訳では無い。随分迷惑な筋もあつたに違い無いが、しかしそうした浪人の存在が、西洋文化崇拜の、唯物功利主義の、義理も、人情も、血も、涙も、良心も無い、厚顏無恥の個人主義一点張りで成功したいわゆる、資本家、支配階級の悩みの種となり、不言不語の中に日本人特有の生命も要らず名も要らず、金も官位も要らぬ底の清淨潔白な忠君愛国思想を天下に普及、浸潤せしめた功績は大いに認めなければならぬであろう。

従つて歴史に現われない歴史の原動力として、福岡人を中心とするいわゆる九州浪人の名を史上に記念しておく必要が無いとは言えないであろう。

勿論浪人といえども生きた血の通う人間である。家族もあれば羣丸さんまるもある。生命いのちも金いのちも官位いのちも要らないとか何とか強情を張るにしても、そんな場面にぶつかる迄に何とかして喰い繋いで生きて行かなければならない。いわんやその命を捧げた乾兒こばねどもが、先生とか親分とか云つて媚集まつがして、たより縋すがつて来るに於てをやである。浪人生活の悩みは実に繋つなつてこの一点に存すると云つても過言で無い。

だから……と云う訳でもあるまいが、彼等浪人生活者の中にはいつもその浪人式の圧迫力を利用して何かの利権を漁つている者が多^い。しかしその漁り得た利権を散じて、何等か浪人的立場に立脚した国家的事業に満進するならばともかく、一旦、この利権を擱むと、今まで骨身にコタエた浪人生活から転向をして、フツツリと大言壯語を止め、門戸を閉ざして面会謝絶を開業する者が珍らしくない。又はこれを資本として何等かの政権利権に接近し、ついこの間まで攻撃罵倒していた、唯物功利主義者のお台所に出入して、不純な榮華に膨れ返つている者も居る。もつとも、そんなのは浪人の中でも、第一流に属する部類で、それ以下の輕輩浪人に到つては、浪人と名づくるのも恥かしいヨタモンとなり、ギャングとなり、又は、高等乞食と化しつつ、自分の良心は棚に上げて他人の良心の欠陥を攻撃し、頼まれもせぬのに天下國家、社会民衆の事を思うて居るのは自分一人のよう

事を云つて、放蕩無賴の限りをつくし、親兄弟を泣かせている者も居る。生命が惜しくて名誉が欲しくて、金や職業が、焦げつくほど欲しい浪人が滔々として天下に満ち満ちて居る状態である。

その中に吾が頭山満翁は超然として、一依舊様、金錢、名譽などは勿論の事、持つて生れた忠君愛国の一念以外のものは、数限りも無い乾父、崇拜者、又は頭山満の佔券といえども、往来の古草鞋ぐらいたしか考えて居ないらしい。否、現在の頭山満翁は既に浪人界の巨頭なぞ云う俗な敬称を超越している。そこいらにイクラでも居る好々爺ぐらいたしか自分自身を考えていないらし。かつて筆者は数寄屋橋の何とか治療の病院に通う翁の自動車に同乗させて貰つたことがある。その時に筆者は卒然として問うた。

「どこか、お悪いのですか」

「ウム。修繕り居るとたい。何かの役に立つかかも知れんと思うて……」

その語気に含まれた老人らしい謙遜さは、今でも天籟の如く筆者の耳に残つて居る。

以下は筆者が直接翁から聞いた話である。

「世の中で一番恐ろしいものは娘に正直者じゃ。いつでも本気じやけにのう」

「四、五十年前の事じやつた。友達の宮川太一郎が遣つて来て、俺に弁護士になれと忠告し居つた。これからは権利義務の世の中になつて来るけに、法律を勉強して弁護士になれと云うのじや。その後、宮川は牛乳屋をやつて居つたが、まだ元氣で居るかのう。俺に弁護士になれと云うた奴は彼奴一人じや」

又或る時傍の骨格逞しい眼付きの凄い老人に筆者を引き合わせて曰く、

「この男は加波山事件の生き残りじや。今でも、良え荷物（国事犯的仕事。もしくは暗殺相手の意）があれば

直ぐに引っ担いで行く男じや」

「西郷南洲の旧宅を訪うた処が、川口雪蓬と云う有名な八釜し屋やかまの爺おやじが居つた。ドケナ（如何なる）名士が来ても頭ゴナシに叱り飛ばして追い返すと云う話じやつたが、俺は南洲の遺愛の机の上に在る大塩平八郎の洗心洞割記さつきを引っ掻んで懷中ふところに入れて來た。それは南洲が自身で朱筆を入れた珍らしいものじやつたが、その爺おやじが鬼のようになつて飛びかかるて來る奴を、グッと睨み付けてサッサと持つて來た。それから俺は日本廻国をはじめて越後まで行くうちに、とうとうその本を読み終つたので、町亭に礼を云うて送り返して置いたが、ちょっと面白い本じやつたよ」

これ程の豪傑、頭山満氏がタッタ一つ屍古へこ垂れた話が残つてゐるから面白い。

その日本漫遊の途次、越後路まで來ると行けども人家の無い一本道にさしかつた。同伴者がペコペコに腹が減つていたのだから無論、大食漢の頭山満氏も空腹を感じていたに相違ないのであるが、何しろ飯屋は愚か、百姓家すら見当らないので、皆空腹を抱えながら日の暮れ方まで歩き続けた。

そのうちに、やつと一軒の汚ない茶屋が路傍みちばに在るのを発見したので、一行は大喜びで腰をかけて、何よりも先に飯を命じた。ちょうど頭山満氏が第一パイメの飯を喰い終るか終らない頃、その茶屋の赤ん坊が、頭山満氏のお膳の上の副食物を眼がけて這いかかつて來るうちに、すこしばかり立ち上つたと思うと、お膳の横に夥しい粘液を垂れ流し、その上に坐つて泣き出した。

それと見た茶屋の女房が、直ぐに走り上つて來て、何かペチャクチャ云い訳をしながら、自分の前垂れを外して、その赤ん坊の尻を拭い上げて、その粘液の全部を前垂れにグシャグシャと包んで上り口から投げ棄てると、「へイ。あなた。お給仕しましぇう。もう一杯……」

頭山満氏黙々として箸を置いた。

「モウ良え。^えお茶……」

頭山翁の逸話は数限りもない。別に一冊の書物になつてゐる位だからここにはあまり人の知らないものばかりを選んで書いた。あんまり書き続けて居るうちに、諸君の神経衰弱が全癪^なり過ぎては却つて有害だからこの辺で大略する。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

頭山満談話選

頭山
満談

明治十年戦争の翌年、板垣退助との交渉

*『頭山満翁正伝（未定稿）』（一九八一年、舊書房刊）より、頭山満の談話記録を抄録。本篇以下に統いて掲載する頭山の談話も同じ。各見出しほは本書収録に際して内容紹介的に付加したものである。本篇は、自由民権運動が最盛期を迎える中で頭山が民権運動に参加していく時期、頭山二十四歳の頃についての回顧談である。底本第二章其一より。

「十年戦争の翌^{あく}年の即ち十一年の春、夏になりかけじやつた。御所の谷の畑に薩摩薯を植えるので畑に立つて居つた所が、来島恒喜がやって来て『大久保（利通）^{（大久保）}が斬られた、そうして土佐の板垣（退助）^{（板垣）}がそれを機会に何かやりそうな風聞がある』といふ。『そらか、何か板垣が本当にやるなら一つ助けてやらせよう、ともかく今から土佐に行って一つ板垣に会つて実際を質して来よう』と鏑を投げ棄て……。その頃は十円の金も重い時だったので筒井（実顕名）の兄さんに十円借りて、それで奈良原（原至）^{（奈良原）}が一緒に行くというから二人で土佐に出かけた。三田尻から三ヶ浜を通つて伊予からずつと土佐に行つた。嶮岨な九十九曲りとか何とかいう所を越して行つた。道のない無駄な道を通つて、大分奈良原を困らせたことがある。俺は大飯を食うことと、食わんこと、歩くこと、この三つなら非常に強い。俺と同じように歩ける奴は居らんじやつた。その頃の宿料は十三銭だったね。昼の弁当まで持たせて出す。今の百分の一だな。

それで板垣に会つたところが、板垣は初めは余り詳しい話をせずに『今のようなことで政府がやっておれば、

陛下は全く民の怨府となる、そうして独夫の紂(放された君民に見
君主の王)みたようなことになる』そういうことを言った。俺は尊皇攘夷の方だからね。『こいつはフランスのルウソウ論のよくなものじやないか』と思った。そんな奴なら一撃の下にやつづけてやろうと思い、ずっと板垣に膝をすりつけて『何ですか、天皇陛下が独夫の紂になると いうのははどういうことですか、もう一度承ろう』と直ぐにも殴るつもりで進んだ。すると、

いやそれはこういう訳でござります、今この要路に居る岩倉(岩倉
見祝)という者は袴龍の御袖にかくれて、政を擅(ほし)まにし、その功は己れに收めその過ちは天子に帰する。結局至尊を民の怨府となし奉るような非常に暴虐な私権を振るう。それで余りにも許すべからざることと思って、かつて私は彼に向こうて、貴方のようなことをおっしゃれば陛下の詔を矯めてでもおやりになりますかと質(たた)しました。いやそれは事によればだね、こうしたことがいいと思えば詔を矯めてでもやると彼は答えました。それで、ああそうですか、そういうことを承ればそれで宜しいというて私は朝廷を去る決意をしました。こういう様にその功は己れに收めその過ちは至尊に帰するような恣(ほしまさ)なやり方をすれば、遂に禍いが天皇様に及ぶ。これは何とかせねばならぬ。私は憲法を決め、責任内閣を造つて天皇様を神聖冒すべからざる安泰の位置にお立ちになることにしなくてはならぬと考えている。これが私の民権を主張する訳だ。

私が初めそういうことを考えた原因はこうです。官軍が会津を攻める時にいよいよ孤城落月の間際に何者も会津を助けるものはない。その時、会津に非常な豪農がいたが、それがよほど偉い男で、三百年来の君恩に報ゆるのは今日だといって、官軍なんぞは少しも眼中に置かず、自分のあるだけの物をどんどん傍若無人に城中に運び込む。自分の従類を叱咤してね。全く目覚ましいことをやつた。それで敵も味方も感心し、官軍までも頻りに感心な奴じやといって褒めるばかりだった。その時に私は手を組んで考えた。これは三百年來妻子を養い、その家に安住した永い恩義に対し、それ位のことをするのは人間として当たり前のこと

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

來島恒喜の部

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-sui.com



来島恒喜（くるしま・つねき）1859年生、1889年歿

『来島恒喜』抄

的野半介監修

*的野半介監修『来島恒喜』（一九一三年、岡保三郎刊）より第二十章から第二十七章（最終章）本文を抄録。頻繁に傍点数種が使われているがこれは全て省いた。的野半介は平岡浩太郎の義弟、玄洋社員、衆議院議員、一八五八年生、一九一七年歿。

大隈案に対する反対運動と恒喜の出京

条約改正問題起るに当り、中央に於て反対運動の先鞭を着けたるものは、大同協和会にして、大同俱楽部、及び保守党中正派、これと協同運動を執りしといえども、九州に於て、反対運動の主働者となり、中堅となりたるものは、玄洋社及び國権党、即ちこれなり。

大隈外相は、改進党の勢力を以て羽翼となし、条約改正を断行せんとせしかば、九州改進党を通じて、九州地方の反対派を弾圧せんとしたりき。由來、玄洋社は、熊本の相愛社と浅からざる因縁ありしにも係らず、条約改正問題起るに際し、私情をなげうちて公共に殉じ、國権党と同一の歩調を執り、頭山満と佐々友房とは、相提携しておののその団体を代表し、中央に運動するに至れり。これより先、國権党がその政敵たる熊本改進党のために包囲、攻撃を受くるや、頭山は佐々友房の請を容れ、独り義侠的精神を以てこれに応援し相提携して運動する所ありき。時に平岡浩太郎、進藤平太等、頭山を諫めて曰く「佐々は権變の士なり。もしこれと事を共にせば、恐らくはその利用する所とならん」と。頭山曰く「佐々が、吾人を利用すると否とは、余の関する所に非ず。余

は、唯、その信する所に由りて進退するのみ」と。終にこれを肯んぜざりき。しかして玄洋社は条約改正問題起りしより以来、九州改進の大隈案に賛成せるに係らず、國權党が率先して極力これに反対しその政見期せずて一致せしを以て、終に相提携するに至りしなり。

當時中央に出でて反対運動に従事したるものは、頭山なりしといえども、福岡に在りて、同志を糾合し、中止の目的を達せんがために、筑前協会を組織し、大いに中止派に応援したりしものは、香月恕経、平岡浩太郎、進藤喜平太等なりき。當時、筑前協会より政府に建白したる意見書を読めば、彼等が条約改正案に対する意見如何を知るに足るべし。その書に曰く、

条約改正に対する意見書

外交の得失は、國家榮辱の分るる所、権利伸縮の関する所なり。現行条約の不完全にして、独立国の体面を汚損するの甚しきは國民一般これを憤慨せざるものなし。故にさきに、条約改正談判の汚点を一洗して、以て我が帝国の権利を回復するならんと、その談判一日も早く結了せんことを望まざるはなし。然るに、何ぞ料らん、その条款の一度外国新聞に上るを見るに及んで、國家の汚辱は、一層甚しきを加え、権利の毀損は、再び伸暢することの難きに至らんとは。ここに於てか、慶賀の声は、変じて失望大息の声となり、その不可を唱え中止を望むの論は、囂然として天下に充满せり。しかして世上伝説する所に依れば、それ等といえども、また実にこれを是認すること能わぬ。今その改正案の不可なるゆえんを挙ぐれば、大凡そ左の如し。

- 第一 我が自主権を毀損すること、
- 第二 憲法の精神に違反すること、
- 第三 行政の大権を汚穢すること、

第四 治外法権の撤去を期し難きこと、

第五 内治干渉の門を開くこと、

第六 一切課税の権を得ざること、

今各項に付きその不可なる理由を陳せん。

第一 それ、条約各國が、能くその平和を永遠に保持するゆえんは、各自自主独立の権利を俗持して互に相犯すべからず動かすべからざるの実勢あるを以てなり。もし一度、この権を失墜するときは、国その國に非らず、國その國に非らざるとときは、既に対等の権なし、対等の権なくして能く対等の交際をなすものは、それ等未だこれを聞かず上記の第二項以下、皆我が自主権を毀損するゆえんに非らざるはなし。そもそも自主権にして毀損せらるるときは、一個人に於けるもなお且つ社会に立つこと能わず。いわんや、堂々たる彼我対立の国交上に於て、この悖理の条約を締結せんと欲する、某等、その何の意たるを知るに苦しまざるを得ざるなり。論者或いは言う、

国交の事は、単純なる理論に依拠してこれをなすべからず、その間自ら情実の存するなり、たとい理論は以て彼を屈伏せしむるに足るものあるも、いやしくも彼我強弱の度を察せず、従来慣行の情を考えず、徒らに、我れの希望を達せんと欲するも、彼れもしこれを承認せざることあらば、我れ將たこれをいかんせん。強いてこれを成さんとすれば我れより平和を破り、しかして彼れをして我れを罪するの口実を得せしむるものなり。寧ろ少しく条理をまぐることあるも、先ず目下幾分の利益を收取して、他日完全の希望を達するの地歩を占有せんにはしかず。いわんや、改正条約を以て、これを現行条約に比すれば、その利の大なることもとより同日の論に非ざるをやと。某等改正案の因りて起る所を推すに、けだしこの外に出でざるべき。それ、外交の事たる、彼我の間自ら情実の存するあるは、某等といえどもこれを知らざるに非ず、平和を彼等の不得策たることもまたこれを知る、その改正条約を以て、現行条約に比して、利益大なりというに

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

杉山茂丸の部

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-
sui.com



杉山茂丸（すぎやま・しげまる）1864年生、1935年歿

天下の鬼才、杉山茂丸

頭山 满談

*『頭山満翁正伝（未定稿）』（一九八一年、葦書房刊）第三章其七より。杉山茂丸は頭山と十ほどの年齢の開きがあつたが、頭山にとつては無二の同志、盟友であった。

「杉山家は代々脳溢血で倒れたようじやが、杉山もやはり脳溢血でやられ、そのまま意識不明になつたので、何事も相語ることは出来んじやつたが、発病三日前に俺のところへ来て二時間余りも話し、彼の方から昼飯を催促して一緒に食つたがそれが生別となつた訳じや。これより先、五十日も前じやつたか、俺と杉山との交友五十年を祝うというので、星一^{はじめ}、真藤慎太郎等の发起で金菊祝いをやってくれた。その後、発病までズッと元気じやつたが彼は自ら短命とみて、命の引き伸ばしには随分用心深かつた、があれ以上引き伸ばしが出来なかつたわけじや。

杉山と俺とが初めて知つたのは、俺が三十、彼が二十二だつた。杉山は俺より先に上京した。十七の時じやつたそな、西南戦争後、藩閥政府に対する民間志士の気持ちちは、年少の彼とて同じで、島田一郎等の大久保要擊の後を承けて二番手をやろうと思つて岩倉、伊藤を目指していたのじやろう。今、鳥取で老後を養つている八十四歳の老剣客杉田秀彦なども、年はズッと上じやが杉山の同志じやつた、杉山は早熟な男じやつたよ。

彼の親父は杉山灌園という漢学者で、杉山は子供の時からその影響を受け、聰明な奴で秀才じやつた。もとより尊皇愛國の念に篤い男で志天下にあつた、胆と識とを兼ねた豪の者じやつた。その大胆不敵にして勇気のある

ことは大したものじやつた。何人に対しても忌憚なく、委細構わづやつづける気象じやつたが、俺に対しては敬重を極めた。

彼は東京に出て来た時から、郷里の先輩などは眼中になく、誰のところへも訪ねて行くようなことはなかつたが、佐々（佐々）か八重野範三郎かの紹介で初めて俺を訪ねて来てからといふものは一日も離れんようになつた。杉山と結城（結城虎）は初めからの玄洋社員ではなかつた。社でも彼等を専外の者と見ていたが、ただ俺について働いた関係から後には社と密接するようになり、社の兵站部、実業方面のことにはこの二人を働かせた。なかなか間に合う奴じやつた。

結城は後に自分独りで炭礦を經營し、かなりの産を成して他界したが、杉山は金持にならうとすれば十分なれる男じやつたが、必要だけの金に困りはせぬが、金があればサッサと使う男で溜めるなどいう気は少しもない男じやつた、若い頃、越後の油田を持っていたこともあり、それを続けていたら大したものだつたろう。

一体彼は先きの見える男で、普通の者より二十年も三十年も先きのことに着眼した。それで法螺丸という名がついた。筑前の山寺に大きな法螺貝があつて、誰もそれを吹けなかつたのを彼が容易に吹き鳴らしたそうで、それも法螺丸という名の出来た原因じやといふものもあつた。博多の築港、関門トンネルなど彼が思いついて計画したものじや。

本当に腰を入れてやつたら何でも仕出来（しえ）る男じやつた。国家的事業にも大いに貢献した、日露戦争中に米国で外債募集に働いたし、日露講和の際に北洋漁業権を獲たことや、日韓合併や、根気よく陰に居て働いた。興業銀行の創立なども彼の骨折りで、伊藤、桂（桂太）、井上（井上）などが彼を初代の総裁に推したが断つた。

一言にしていえば彼は天下の鬼才じやつた。何でも出来る、由井正雪のような男じやつた。彼の二十何歳かの詩に『遮莫世上奈人言、志願一注今尚存、誰識貧寒男子胆生涯毀譽委乾坤』というのがある、この考へで七十二年の生涯を貫いた快男児じやつた。」

（昭和一八、一〇、七速記）

『百魔』抄

杉山茂丸著

*『百魔』（一九二六年、大日本雄弁会刊）より、巻頭の数章を抄録。青年時代の杉山の“國士業事始め”的様子や徳義觀を窺うことができる回顧談。

同郷の偉人頭山満氏との初対面

壯傑俊傑に会うて神機を覺り
俊傑士道を説いて盟交を契る

庵主が佐々克堂（友房）氏等と誓約をして、政權を私して国威の宣揚を沮害する藩閥の頭を叩かんと覺悟して、故郷を立ち出で、馬関海峡に陽関曲を高唱して、生還を期せず、急箭の如く東京に乗り込み、阿修羅王の荒れるが如く荒れ廻つたので、たちまち時の政府の嚴忌に触れ、鼎鑊斧鉄前後に迫りて、広き大江戸の中に五尺の体の置き処もないようになつたのは、明治十七、八年の頃、即ち故三島日本銀行総裁の嚴父三島警視総監の宰領であつた。幾多の同志は牢獄に繋がれ、刎頸の親友は道途に憤死し、常に志を通ずるの知人も四方に紛散して、運善く庵主（杉山茂丸の号は其日庵）だけは、同情ある義客俠婦等のために縹緥桎梏の難を免れ、僅かに新聞売りをして人目を忍んで居たのである。この時庵主のためには彼の水滸伝の柴大官人ととも云うべき熊本の八重野範三郎と云う長者

が、深く庵主の境遇を憫み、佐々克堂氏等と共に庵主を同郷の偉人頭山満なる人に紹介せんと勧めた。當時庵主は郷里を見限る事、他郷の如く、郷人を侮蔑する事、異人種の如き時故、素より頭山氏の姓名などを記憶する筈もなく、唯だ単身独歩、自分の考えたる事だけを実行して、安んじて死に就くの覚悟であつたため、深く八重野氏の厚意を謝すると同時に、堅く同郷人に面会する事を拒絶した。しかるに八重野氏は既に庵主の性情と胸中の秘事とを観破して居たものか、又はこのままにして可惜若者を道路に斃死せしむる事をよほど氣の毒に思うたものか、その勧誘の決心は牢として抜くべからざるものがあつた。庵主も今は辞するに詞なく、ええままで、一度頭山氏とかに遭いさえすれば、この温厚の長者に対する義理も立ち、又それ程豪いと云う頭山氏の人物も分かるからと、ともかくも一度面会の事を承諾した。當時庵主は銀座三丁目裏町の木賃宿に土佐出身の書生一人と同宿して居たから、それと寝物語りに「明日は八重野氏の余儀なき紹介にて、福岡の豪傑頭山満と云う人に面会するのだ」と云うたら、その書生が大変正直な物事に氣の付く男で「そんな人に貴方面会して、我々の秘密を観破されでは駄目ですよ、又、今時持て囃す高姓大名の族やからと云うものは、大抵腹抜けの外踏張りばかりであるから、しつかり褲をぐめて掛からねばいけませんぜ」と云うから、庵主は「何、心配するな、一匹の人間が一匹の人間に遭うて、負けて帰つて来て堪るものが、又、人に云われた位でかくまで犠牲を払うた殺人魂(害の悪き人殺)」が止められるものか」と云うた。その翌日十一時頃出掛けの時、その書生が、「貴方、新聞売りなら頗冠りでも良いが、天下を以て任ずるの國士が、同郷の豪傑に面会するのに、帽子も冠らずに往くは恥じやから、僕が昨晩夜店で七錢で買つて來た、この帽子を冠つてお出で」と云うから、礼を云つて冠つて行つたが、今考えるとこれが絹ハットの古物である。當時庵主等の仲間は大抵尻切れの印半纏位を着て働いて居たが、庵主だけはどう云う工面であつたか、発明初売りの紀州フランネルの荒い立縞ひそまきの單物であった。それが大兵肥満で絹帽子を冠り、尻切れ草履でのそのそと出掛けたから、その恰好は宛で褲拘ハラトが宮中へ参内する様である。頭山氏の宿は芝口一丁目の田中屋と云うので、店先で案内を頼むと「二階まるへ」と云うから登つて行つて、その部屋を見て先づ第一に驚い

SAMPLE
ShowichiShimizu.com

た。部屋の入口に「御宿料十八銭前金」と書いた紙が張つてある。破れ襖を明けると、中が六畳で柱も鴨居も菱形りに曲がつて居る。壁落ち障子破れた真中に、縁の欠けた火鉢が一つ赤ゲットの上に乗つて居る。その向こうに久留米絣の羽織を着た五分刈の三十四、五のショボ鬚の生えた男が一人坐つて居る。「サア是へ」との声に応じて中に入る。庵主は常から、冠り付けぬ帽子故、これを取る事を忘れ、その上大男で高い絹ハットを冠つたまま故、ごつんと鴨居にぶつかり、ぺこんと潰れて落ちた。そのまま中に入りて、火鉢の向こうに座を占め、丁寧に初対面の挨拶をしたら、向こうも中々丁寧であったが、その眼光の炳々として人を射る凄まじさは、むしろ安宿の破れ座敷も眩ゆき計りの異彩である。間もなく隣室より出て来た人々は、的野半介、月成元義、来島恒喜、木本常三郎など云う、皆、豹眼虎頭の壯士ばかりであった。皆それぞれの挨拶をして、間も無く出ていった跡に、兩人差し向かいで居ると、頭山氏は左脇の床板の破れに口を付けて「おいおい茶を持って来い」と叫んだ。ふいと見ると、その床の間の板は一尺余りも破れて、帳場の有り様がちやんと見えて居る、これでもその宿の破れ加減が分かる。しばらくすると頭山氏は徐ろに口を開き、「貴下あなたは官員でも仕て居られた事が有りますか」と云わるるから、庵主は「いや、まだ一度も官員に成った事はございませぬ」と云うと、頭山氏は手を伸ばして傍に転がつて居る絹ハットのへこんだのを取り上げて「これは官員の冠る帽子じゃありませんか」と云うた。庵主はそれも知らぬから「イエそれは木村屋の麺麪屋が冠る物と同じです」と云い、これを動機として色々と咄とした。その頃までは庵主も今程のお饒舌しゃべりでも無かつたが沈重寡言の頭山氏には、尠なからず感に打たれたのである。それからぼつぼつと双方話しして、遂に日の暮るるも忘れ、「貴下あなた牛肉で飯を食うてはどうです」と云われた時は、もう外も真っ暗であつた。間もなくランプを燈し、飯も仕舞い、又、深更まで咄す中、頭山氏はかく云うた「才は沈才たるべし、勇は沈勇たるべし、孝は至孝たるべし、忠は至忠たるべし、何事も氣を負うて憤りを発し、出た処勝負に無念晴らしをするは、その事がたとい忠孝の善事であつても、不善事に勝る悪結果となるものである。この故に平生無私の觀念に心氣を鍛錬し、事に当たりては沈断不退の行ないをなすを要とす、貴下方あなた

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

内田良平の部

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-
sui.com

内田良平（うちだ・りょうへい）1874年生、1937年歿

日韓合併思い出話

内田良平 談 夢野久作著

はしがき

九月八日（一九三五年）内田良平氏の病床を神奈川県茅ヶ崎の別荘に訪うた。

日韓支を打つて一丸となし、全地表を蝕む白禍を一掃すべく幾百千の健児を率い、死生を賭して粉骨碎身する事、四十年、威武に屈せず貧賤も移らず、新興日本の浪人界を代表する火の如き意氣を一貫して幾度か風雲を叱し朝野官民を指導し、東洋男兒のために万丈の氣を吐いた黒龍会主幹内田良平氏は、今や胸患を病んで、絶対に客を謝絶し、茅ヶ崎の閑居に静臥し、夫人と令嬢に護られて鶴髪、銀鬚、骨立、凄愴、残暑に輝く庭前の芝生と王仁三郎描く処の観音像を眺め暮らして居る。

「おお、よく来てくれた。君のお父さん（杉山）には生前色々と御厄介になつた。今一度会いたかつたが」と咳入つて、劈頭、筆者をして暗然、言葉無からしめた。亡父杉山茂丸に伴われ、幼くしてしばしばお会いした氏、昔日の生命知らずとして、全鮮を震駭せしめた柔道高段者の面影はアトカタも無い。しかしその炯々たる明澄な眼光と、鏗びた、底力の深い聲音とは昔ながらにして更に風格を高め、東洋の前途、世界の形勢を指呼し

*夢野久作著『近世快人伝』（一九三五年、黑白書房刊）より。初出は『福岡日日新聞』への連載で、「内田良平」の署名で発表され「はしがき」末尾に「（夢野久作記）との注記がされたもの。

SAMPLE
Shotshinsui.com

て日韓合邦二十五年の昔を語る時、聞く者、語るもの共に血湧き、肉躍り、その重態を忘れてしまった。

「近頃は医者を謝絶してしもうてのう。どうも医者という奴はイカン。医者が来ると熱が高くなる様じやから止めてしまつて自分の精神力一つで今一度、起上がる修養をして居る。ナア二人間は精神力一つだよ。僕は生まれながらにして貧血の重態患者であつたが、やはりこの気力一つで押し切つて来たものじや。

僕は浪人商売のために三十万円ばかりの借金を作つて、家も何も三重四重の差し押さえを喰うた。借りる能力ばかりで、払う能力が無い。つまり貧乏病の重態患者で恢復の見込みが絶対に無い筈であつたが、これは国家のために最初から覚悟して居た事じやから平氣の平左で居る。友人の葛生能久君なんぞが、今の通りに絶対面会謝絶を命じ、色々と奔走して切り抜けてくれたお蔭で、今では生活の方はその時から比較すると貧弱ながら借金の軽い健康体に帰つてゐる。但し肺病の方は覚悟も何もして居なかつたが、これとても貧乏病と同様で、医者も薬も無い様なものじや。とやかく考えたとて追付く事じや無い。

天が僕に命じた仕事が尽きねば生きて居るじやろう。モウよいと思うたら、その時に天が殺してくれるじやろうと思ひて居るから体温器も薬も要らぬ。ただ閉口するのは退屈な事じや。よい処へ来てくれた」

あまり長座をして病気に障つてはいけないと思つたが、さぞかし云いたい事が鬱積していたのであろう、立ち上がろうとすると一段と声を高められるので、お辞儀してからモジモジする事また三十分、聞きたい事を山の様に残して辞し去つた。翁の閑荘の屋根が青葉の蔭に見えなくなるまで、振り返り振り返り物を思わせられた。

閔妃一族の專横

自分は若いうちから伯父の平岡浩太郎の處に居て、そこに出入りする朝鮮、支那、南洋の志士に接し、東洋の形勢を聞き慣れ見慣れて、十五、六の時から支那やロシアの横暴に切歎扼腕し、朝鮮の内政の腐敗堕落を慨し、日本政府の平和政策を、万事手遅れにして行くいわゆる追隨外交の自烈つたさに憤激の血を湧かし、十八、九の

SAMPLE Shishi-Shinsui.com

時には既に一見識をえん惧え、柔道と共にロシア語などを研究していたものである。

つまり支那や、ロシアが、維新後間も無い日本の軍備の弱少と西洋崇拜的な民心の傾向を見て大いに軽蔑し、先ず朝鮮を取つて、その次に日本を征伐しようとして居る。朝鮮もまた、日本を弱小国と見て取つて、事毎に日本を蹴飛ばし、支那やロシアにクッ付こうとして居る状態が、アリアリと眼に映るようになつたので、東洋の平和を新興日本の力で確保するには単に朝鮮の独立たすきを扶けるだけで安心出来ない実情を、その時分から既にウスウスと感付いていたものである。

明治二十七年、自分が二十歳の時に朝鮮に東学黨の乱が起つた。これは儒教と仏教と道教を一緒にしてその精髓を抜いたような教義で、李朝の二十五代であつたか哲宗王の末年に慶州の水雲先生という学者が云い出したもので、禍いを転じて幸いとする一種の呪文を唱えたり何かして、一時非常な信仰を集めたものであつたが、その目的は朝鮮の弊政を救うにあつたらしく、四十二歳の時に捕えられて斬られた。しかしその弟子に崔時享と云うエライ奴が居て第二世の道主と仰がれ、有司の圧迫と迫害を物ともせず、一生懸命になつて東孝天道の教義を宣伝し、朝鮮代々の横暴を極めた貴族政治の下から朝鮮民族を救うべく、猛烈な活躍を始めた。

しかし朝鮮民族が大昔から遺伝して来た、意久地の無い色々の習慣と、その習慣によつて培われた朝鮮人の事の大思想に根を下ろしている貴族政治の弊害は、東孝天道の教義ぐらいでは救うことが出来なかつたらしい。

その中に哲宗が薨じて李大王が位に即いたが、李朝の政道はいよいよ乱れて、底抜けの状態に陥つて行くばかりであった。すなわち王妃閔氏の一族が李大王を軽んじて王宮に乗り込み、閔氏をケシかけて政治向きの事に口を出してまぜ返させる。そのため朝鮮の役人の綱紀が上から下まで乱れてしまつて、役人となつたら非道い税金を取り放台にして贅沢をする。賄賂をイクラでも取る。高価い金で官位を売買すると云つた調子で、一切の政治がメチャメチャになつて行く。その中にたまたま正義の士が居つて、これではイカンなど云い出そうものなら寄つてたかつてタタキ倒すので、ろくでも無い奴ばかりが役人……と云う事になる。宮中には幫間みたような下

『硬石五拾年譜』抄

内田良平著

*『硬石五拾年譜』（一九二七年、私家版、公刊活字版一九七八年、葦書房刊）より抄録。冒頭には前掲夢野久作の書き書きと重複する話題もあるが、内田良平自身の筆になるものとして、又、より詳細な証言として、省略せずに収録した。「硬石」は内田の号。原典中「天祐俠」とあるものは「天佑俠」に直して表記した。

朝鮮の東学党と天佑俠

同（治明）二十七年二十一歳。三月徵兵検査のため福岡に帰る。時あたかも朝鮮において東学党蜂起し風雲すこぶる急なるものあり。長崎に滞在せる末永節と東学党を援けて大いになす所あらんと欲し、長崎に赴き渡鮮せんとしたるも果たさず。因つて更に手段を講ずることとし博多の家に帰りたるに、関屋斧太郎、久留米の人西村儀三郎の兩人朝鮮より帰来するに会す。目的を問えば東学党援助のため武器弾薬を求むるに在り。余はその危險なるを説き、相携えて速やかに渡鮮せんと勧告す。関屋はこれを肯んぜず、西村と福岡久留米の間を往来し頻りに武器を求むるに苦心せり。余はその事情を末永に報じ、長崎より帰福せしむることとせり。時に同志の朝鮮に在留して釜山を根拠とし風雲の機会を窺える、関屋等以外の一団もまた余等と同様の目的を以て大崎正吉を東京に派遣し、二六新報主筆鈴木天眼を介して頭山満、平岡浩太郎、的野半介等の賛成を得て、協議の上、^{つまび}玄洋社より大原義剛及び余の両名を以て先発となし、釜山の同志と力を協わせて東学党と連絡を取り、その状況を審らかに

するを得るにおいては直ちに援軍を発すべしとの計画を立てて、在京の的野より右の内報を通じ来たりたるにより、余は大いに喜び大原と議し、ダイナマイトを携帯するの必要を認め、これを手にするため赤池に行くこととし、発するに臨み長崎より帰來なし居りたる末永節をして久留米に赴き、閑屋を伴い共に明日門司に来会せしむることとせり。その日夕刻余は赤池に着し、鉱長児島哲太郎にダイナマイト若干を与えることを請う。児島快諾して倉庫掛小川某に荷造りを命じ、伴うて余の宅に来る。けだし余の宅とは両親の居住せる所にして、兄庚も先年來赤池に來たり炭鉱の業務に従事せるなり。途中児島は請願巡査交番所に灯火の明らかなるを見て余に耳語して曰く「交番の巡査は十時頃寝に就くを常とす。しかるに今十一時過ぎに拘らず灯火の照らすはすこぶる不審なり。試みに窺い來たるべし」と。小高き所にある交番所の傍に行きやがて降り来たり「見知らぬ巡査二名請願巡査と何事か話し合い居れり。思うに福岡より君に尾行し來たれるものならん。ダイナマイトの携帯は危険なり、荷造りを中止せしめん」とて自宅に引き返せり。余は失望を禁ぜず。宅に歸れば大原既に來着し、「二番目の叔父徳次郎も來会し両親と兄等五人対座して不安の色を漂わせ居れり。余の座に着くや兄は声を低うして曰く「先刻巡査尋ね來たり、大原君とお前に面会を求めていた。お前は留守なりと答え大原君のみ面会せしに、明日直方警察署に出頭すべき旨申し渡し行けり。お前も必ず召喚せらるべし」と。かかる處に果たして巡査再来せり。余は兄に来意を聞かれたしと請いしに兄は余に代わって玄関に出でしに、査公兄に向かい「貴下は内田コウ氏なるか」と尋ねたり。當時兄は庚と云い余は甲と名告り居りしを以て兄思えらく「庚甲と音同じ、試みにしかりと答ゆるにしかず」と。よつて即座に「ハイ」と言ひしに巡査は「明日本官と直方警察署に出頭せられたし、明朝再び來たるべし」との旨を告げ直ちに辞去せり。兄笑つて奥に入り來たり、「巡査は弟の顔を見知らざるものと思ぼしくかくかくの次第にて去れり。お前は明朝我等の乗り行く汽車より一列車後れて門司に出発せよ。我等は巡査と直方に赴くべし。今夜の事は偶然にて幸先好し、別杯を擧ぐべし」と。この時、児島も來たり会し、七人酒を酌みて時局の談話をなし、天明の頃一睡して徳次郎叔父よりもいたる長船則光の仕込み杖を携え、兄等に後れて

SAMPLE Shoshinsho.com

出発す。直方駅にて乗り換えのため下車せしに兄の姿を認む。一少女あり紙片を持ち来たり余に渡して去る。これを見れば目前の兄が書なり。「客車を同じゆうするながれ」とあり。ここにおいて兄の方を熟視すれば後辺に角袖（くわく袖巡査和服を着た巡査制服でな）の附き添い居るを見る。余は窃かに巡査の愚を笑いつつ門司に着し、石田旅館に入れば大崎正吉、鈴木天眼、大原義剛、日下寅吉、時沢右一等ことごとく集合せり。一同馬関に渡り乗船せんとその準備をなし居りたる際、末永より電報來たり、一と船後のべしとあり。時に兄訪ね來たり直方より門司に來たれる顛末を語つて曰く「今朝直方警察に出頭し、署長とは相識の間柄なれば何の御用かと問ひしに、署長は不思議の顔色をなし君は何のために朝鮮に行かるるかと尋ねるを以て、否 朝鮮に行くにあらず門司に行くなりと答えしに、署長は益々不審の態にて福岡の本署より命令し來たり居る筋あれば、御迷惑ながら巡査を同行せしむべければ、一応門司警察に出頭せられたしと懇談的に申し渡され 門司警察に來たりたるに、署長は玄洋社の出身にして叔父の友人たる大倉周之助なりければ、実は今回大原の渡鮮するを幸い兼て渡航を希望せる弟を托し同行せしむる筈なりしも、旅行券さえ未だ出願せず間に合わざるため延期せりと言ひしに、御舎弟は今どこに居らるるやと問われ上京せりと答えしに大倉、机を擊つて了解せり。福岡本部はその事を誤伝して今回御舎弟が渡韓さるるものと速断し、君に迷惑を懸けたるものならん。御苦勞なりしとの挨拶を受け事済みになりたり。大原は直方にて取り調べを請けたれども、福陵新報（後の九州日報）の特派員証と旅行券とを所持せるを以て如何ともすべからず、直ちに放還せり。かくのごとき始末なるにより最早懸念あるまじければ出發せよ」とて袂たもとを別ち宿を去れり。余等はそれより馬関に渡り、旅券なきものは大崎が朝鮮より携帶せし同志の旅券を用いて船切符を買い、首尾能く乗船せり。当時の旅券は一年ないし三年間の有効期限なりしを以て、他人の旅券を使用するを得しものなり。翌日前釜山港に着し田中侍郎、武田範之、千葉久之助、大久保肇、白水健吉等の同志と会合し、東学党の軍に投すべき準備を協議す。田中曰く「昌原に金鉱を經營せる牧健三は過日馬山浦より火薬ダイナマイトを陸上げしたり。幾何の時日も経過せざれば未だ消費し尽すことあらざるべし。これを奪い我が徒の用に供することと